

『フランス文学研究』 論文執筆要項

- 1) 【執筆言語・分量】 投稿原稿は、日本語、フランス語のいずれかの言語で執筆する。フランス語原稿を投稿する場合は、かならず事前にネイティブ・チェックを受ける。論文の分量は、日本語の場合は、本文、注を含めて約12,000字とする。フランス語の場合は、A4版約10枚（約4500語）とする。多少の増減は認めるが、甚だしい超過は認めない。
- 2) 【ワープロソフト・ページレイアウト】 ワープロソフトはMicrosoft Wordを使用する。「ページレイアウト」→「ページ設定」で「文字数と行数を指定する」をチェックし、文字数は1行38文字、行数は38行とする。
- 3) 【フォント】 本文フォントは、和文MS明朝10.5ポイント、欧文Times New Roman 12ポイントとする。和文では句点は全角ピリオド（.）で、読点は全角コンマ（,）で表示する。
- 4) 【タイトル】 論文タイトルは、1ページ目に1行あけて、14ポイント、**太字（ボールド）**、中央寄せで記入する。副題のある場合は、改行し、12ポイント、**太字（ボールド）**、中央寄せで記入する。
- 5) 【氏名】 氏名は、表題から1行あけて、14ポイント、右寄せで、右に全角2文字分をあけて記入する。姓と名の間に全角1文字（仏文の場合は半角1文字）の空白を入れる。
- 6) 【本文・小見出し】 氏名から2行あけて、本文を開始する。章分けする場合は、左寄せ、**太字（ボールド）**で、番号、ピリオド、章のタイトルなどを記す。例：**1. はじめに**
- 7) 【引用】 引用を入れる場合は、原則として本文との間に前後1行をあけ、全角2文字分の字下げ（インデント）をする。ただし、語学の論文などにおいて番号を付して例文を入れる場合は、必ずしも前後1行をあける必要はない。
- 8) 【注】 注はMicrosoft Wordの「参考資料」→「文末脚注の挿入」を用いる。フォントは本文と同じ和文MS明朝10.5ポイント、仏文Times New Roman12ポイントとする。脚注番号と注との間に半角1文字の空白を入れ、両端揃えにする。
- 9) 【所属】 所属は、本文の末尾の次の行に、右寄せ、（ ）付きで表示する。例：（東北大学大学院文学研究科博士後期課程）など。
- 10) 【要旨】 日本語論文にはフランス語で、フランス語論文には日本語で、20行～30行程度（全体で1ページ以内）の要旨をつける。フォント、標題、氏名、本文は3～6）と同様、所属は不要とする。
- 11) 【原稿提出先】 投稿原稿はMicrosoft Word文書の添付ファイルの形態で、事務局宛てにメールで送る。
- 12) 具体的な執筆にあたっては「執筆詳細」を必ず参照すること（東北大学フランス語学フランス文学文学研究室的ホームページにてダウンロード可能）。

執筆詳細

・段落

日本語論文の場合、全角1文字分あける。フランス語論文の場合、半角5文字分あける。

・作品名・雑誌名

日本語の場合は『 』に入れる。

フランス語の場合はイタリックにする。罫線やアンダーラインは用いない。題名に冠詞が含まれている場合、最初の文字を大文字とする。原則として名詞は全て大文字、形容詞は名詞の前の場合は大文字。

例： *La Quotidienne*

La Comédie humaine

Cinq Grandes Odes

一般的に流布している表記があれば、それに従ってよい。

・論文名・詩・章名

日本語の場合は「 」に入れる。

フランス語の場合は、雑誌所収の論文、詩集の中の各詩、小説や研究書の章の題名は« »に入れる。大文字、小文字の区別は原則として上記の規定に従う。

例：« Mauvais Sang » dans *Une Saison en Enfer*

『地獄の季節』中の「悪い血筋」

・省略・説明

引用文などの一部を省略(中略)したり、代名詞に説明を書き加えたりする場合は[]を用いる。

例：[...] (欧文ではポワン3つ)、[……] (和文では三点リーダー2つ)

[sic] (イタリックにする)

il [=Apollinaire] (人称代名詞の場合、欧文では=を入れる)

ses amis [=d'Apollinaire] (所有形容詞の場合)

Picasso lui a dit [à Apollinaire] (間接目的語の場合=は不要)

彼 [アポリネール] (和文では常に=は不要)

・引用 [基本は執筆要項の7を参照]

フランス語の場合、改行せずに引用する際は« »を用いる。改行して引用する場合、引用文は本文との間を1行あけ、さらに左端を本文より全角2字分(半角4字分)下げ(インデントし)て揃える。その際 guillemets は不要。引用文の始まりが原文でも *paragraphe* の始まりである場合に限り、この引用文の書き出しを半角2字分下げる。引用文の一部を省略したり、説明を書き加えたりするときは *crochets* [] を使う。例：[...] [sic]

本文中で和文を引用する時は「 」を用いる。「 」で文が終らない場合は、「 」内最後の句点(.)は省く。また、本文がその引用で終る時には「 」。とする。

例：

「空には一点の雲もなかったが、日差しは柔らかであった」からである。
山頂は白く輝き、しかも「空には一点の雲もなかった」。

引用は、執筆者による和訳を原則とし、翻訳書を参照の場合は注などで断りを入れる。フランス語のニュアンスが問題となるときにのみフランス語原文を引用してもよい（無駄な引用は避ける）。日本語の語句にフランス語の語句を補足説明として付ける場合には、日本語の語句を「 」で強調しない時は、日本語の語句の後に（ ）に入れてフランス語を記し、日本語の語句を強調する時は「 」内に日本語、フランス語の順で記す。

例：間テキスト性 (intertextualité)

「間テキスト性 intertextualité」

なお、日本語論文中で仏語原語を引用する際の仏語のフォントは Times New Roman、ポイントは和文と同じく 10.5 ポイントとする。

・イタリック体の訳

原文イタリックの訳出には傍点を用いる。大文字で始まる普通名詞の訳出は〈 〉を用いる。

例：la Poésie = 〈詩〉

・文末脚注

注番号（数字は半角アラビア数字に半角の「閉じるカッコ」を加える）は句点（ポワン）や読点（ヴィルギュル）の前に入れる。

例：

彼女はどんなに多くのことを彼 [恋人] に語っていたことか。その細かい棒の動きを表すに足るような、どんな音声を彼女は用いることができたであろうか¹。

Jusqu'à présent, nombreux sont les chercheurs qui ont déjà analysé les enjeux socioculturels de l'oralité et l'autoreprésentation de l'auteur dans ce roman ou d'autres œuvres²。

・作品への参照

作品への参照の記載順序は次の通り。

著者名（姓の第2文字以降は小キャピ [和文論文では9ポイント、仏語論文では10ポイント]）、書名（イタリック体）、刊行地名（パリ、東京以外は記入するが、省略可）、出版社名、（叢書名、省略可）、刊行年、頁。ヴィルギュル（また p. や pp.）の次には半角1文字分のスペースを入れる。

例：Albert THIBAUDET, *Gustave Flaubert*, Gallimard, 1935, pp. 292-293.

鎌田博夫『スタンダール 夢と現実』、法政大学出版局、1988, p. 78.

・論文への参照

参照が1ページの場合は p. X, 複数ページにわたる場合は pp. X-X と記す。

雑誌、論文集などに掲載された論文への参照の記載順序は次の通り。

筆者名 (姓の第2文字以降は小キャピ [和文論文では9ポイント, 仏語論文では10ポイント]), 論文名 (和文論文は「」, 仏語論文はギユメ« »に入れる), 雑誌名 (和雑誌は『』, 欧雑誌はイタリック体), 巻号, 刊行年, 頁. ヴィルギュル (また p. や pp.) の次には半角1文字分のスペースを入れる。

例:

Jan BAETENS, « Postérité littéraire des "Anagrammes" » in *Poétique*, n° 66, 1986, p. 225.

宮本陽子「サドの三つのジュスチーヌの比較」, 『フランス語フランス文学研究』, n° 47, 1985, pp. 13-21.

・ *op.cit.* / *ibid.* / *in* / *dans* / *voir* / *cf.*

原則として、書誌情報を既に紹介した作品参照については、和書の場合は「前掲書」、欧書の場合は *op. cit.*, 書誌情報を既に紹介した論文参照については、和論文の場合は「前掲論文」、欧論文の場合は *art. cité.* を用い、作品参照・論文参照共に、直前の注で触れたものは、和書・和論文の場合は「同」、欧書・欧論文の場合は *ibid.* (*Ibid.*) を用いる。ページ数が直前の注と同じ場合は「同」または *ibid.* (*Ibid.*) のみで可。あるいは Saussure (1916: 21) の様な記述も可。*in* は雑誌等複数著者の場合、*dans* は単独著者の場合に用いる。和書・和論文の場合は「所収」を用いる。*voir* (*Voir*) はあるテーマについて別のところに書かれている場合、*cf.* (*Cf.*) は具体的にそれが書かれている場合に用いる。

・略号

略号を使う時は、何の省略であるか必ず指示する。

例: Jean-Jacques ROUSSEAU, « Ébauches des Confessions » dans *Œuvres complètes* (以下 O.C. と略記する), t. I, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1995, p. 1154.

・分綴

基本的に Microsoft Word の「ハイフネーション」は「なし」に設定する。どうしても分綴しなければならぬ場合は、次の諸点に注意する。

- a) 2 母音間 (pi/ano), アポストロフ (l'/heure) の次では切らない。
- b) 大文字のみによる略号の大文字同士の間 (S/NCF), 姓とその前の大文字 (A./Rimbaud), 月と年 (janvier/2002), 日と月 (1/janvier), ローマ数字を含む固有名詞でローマ数字の前後 (Louis/XIV), ページの略語とページ数の間 (p./123) では切らない。
- c) 前行末には2文字以上残し (アポストロフでつながっている2文字でもよい), 最後にトレデュニオンをつける (la-/pin)。
- d) 次行に1字だけ送るのも避ける。
- e) 2子音間ではその間 (har/monie), 3子音, 4子音間では2つ目と3つ目の間で切るのを原則とするが, 例外に注意する (tr, br, tl, bl, th, ph 等の2子音字は切らない)。

- f) x,y は前後が母音の場合は切らず (exister), 後が子音の場合は x,y の後で切るのが原則 (mix-/te).
- g) 原則としてアクセントで分綴し, 必要な場合に語源的な分綴をする.
- h) 次行が発音上ゼロ音綴で終わることは避ける.